

筑後国府跡

—第 297 次発掘調査報告—

令和 3 (2021) 年 2 月
久留米市教育委員会

序

久留米市は古くから水路と陸路の要衝としての位置を占め、筑後地方における中心都市として発展を遂げてきました。また、それに伴い市内各所には数多くの文化財が残されています。

今回の調査は、久留米市街地の東部にあたる筑後国府跡で実施しました。今回の発掘調査とその成果を通して、久留米の歴史と文化財保護に対する理解や普及などに貢献できれば幸いです。

また、今回の発掘調査に際して、土地所有者の方をはじめ、近隣住民の皆様に多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

令和3年2月28日

久留米市教育委員会
教育長 井上 謙介

例言

1. 本書は宅地造成に先立ち、株式会社宝永工業代表取締役古賀勝浩氏の委託を受けて実施した、筑後国府跡第297次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、久留米市市民文化部文化財保護課の長谷川桃子が担当した。
3. 遺構実測図の作成は、調査担当者と藤木幸子、中村麻衣が行い、浄書は長谷川が行った。
4. 遺物の実測と浄書は長谷川が行った。
5. 遺構写真はCanon EOS6D Mark IIを用いて長谷川が撮影した。遺物写真は、久留米市埋蔵文化財センターにおいて、PENTAX K-1 IIを用いて長谷川が撮影した。
6. 図面の方位は座標北を示す。基準点の座標は国土調査法第II座標系（世界測地系）を用いた。なお、平成28年の熊本地震に伴うパラメーター補正は行っていない。
7. 遺構表記の略記号は、SD-溝、SK-土坑、SP-ピットを意味する。
8. 実測図と観察表、写真図版の遺物番号は全て同一である。
9. 出土遺物・図面等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
10. 本調査の略記号はTKH-297、調査番号は202001である。
11. 本文の執筆と編集は長谷川が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	7

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

本調査は、宅地造成に伴う事前の発掘調査である。令和2年2月14日、土地所有者である株式会社宝永工業代表取締役古賀勝浩氏から久留米市合川町字田代1194-5、1195-1、1195-3、1195-8、1196-1における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡に含まれ、試掘確認調査においても遺構が確認されたため、発掘調査が必要である旨を回答した。同年3月23日に「発掘調査の依頼」が提出されたため、同年4月1日に久留米市長と土地所有者は筑後国府跡第297次調査の委託契約を締結した。

現地調査は令和2年4月8日から5月7日まで行った。遺物整理と報告書作成は令和3年2月28日まで行った。

2. 調査及び報告書作成にかかる体制

調査委託者：株式会社宝永工業 代表取締役 古賀 勝浩

調査主体：久留米市教育委員会 教育長：井上 謙介

調査総括：久留米市 市民文化部 部長：竹村 政高

次長：西村 信二

文化財保護課 課長：水島 秀雄

課長補佐：久保田由美

課長補佐兼主査：白木 守 丸林 禎彦

主査：水原 道範

事務主査：小澤 太郎

調査担当：長谷川桃子

整理担当：米澤美詠子 今村 理恵 宮崎 彩香

発掘調査臨時職員（会計年度任用職員）

高尾 春代、田中 樹子、中村 麻衣、藤木 幸子、丸山 幸、渡辺しげ子

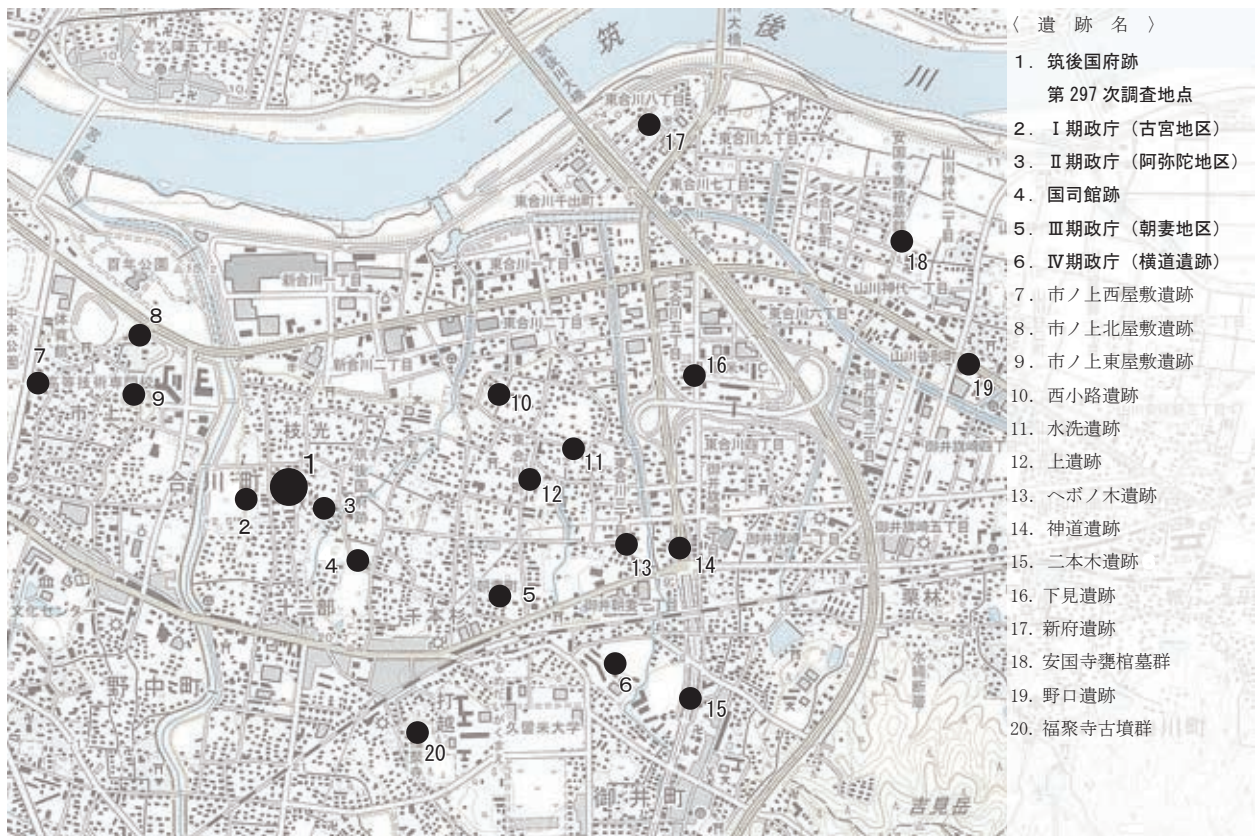
発掘調査整理臨時職員（会計年度任用職員）

大津山恵津子

Ⅱ. 位置と環境

筑後国府跡は、耳納山地西端に聳える高良山から北西へ派生した東西 1.0 km、南北 0.7 km 程度の低位段丘上、通称枝光台地に立地する。段丘の南には水縄断層帯が東西にのび、断層崖下には湧水がみられる。国府域は、台地の西側の高良川、東側の井田川、北方の筑後川氾濫原、南方の水縄断層系の断層崖によって画されている。

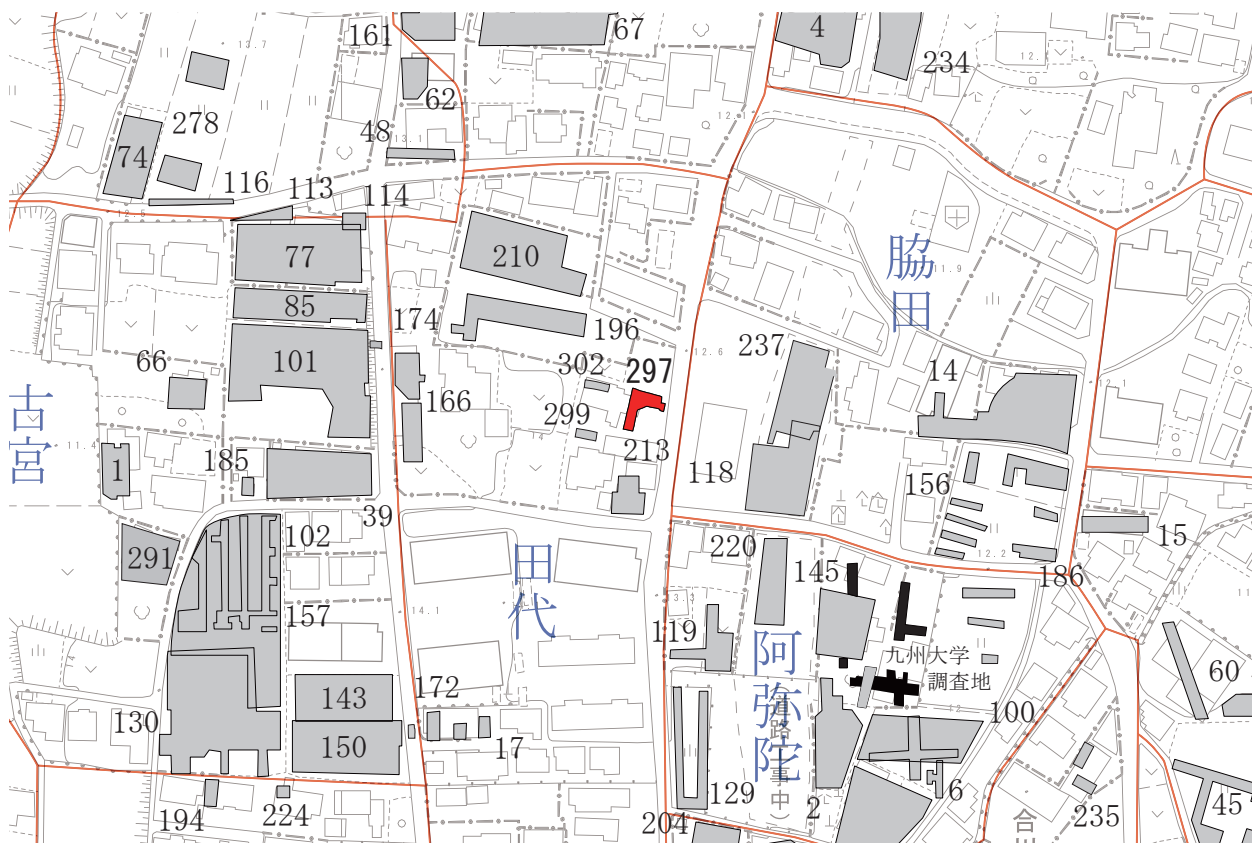
筑後国府跡付近では、旧石器時代から近世まで数多くの遺跡が確認されている。旧石器時代では、二本木遺跡や野口遺跡でナイフ形石器や台形石器などが縄文時代以降の遺構の埋土・包含層から出土している。縄文時代では、竪穴状遺構や土坑などが確認されている前期～後期の野口遺跡をはじめ、筑後国府跡、神道遺跡、西小路遺跡、新府遺跡、上遺跡、へボノ木遺跡、横道遺跡、水洗遺跡などでも資料が得られている。弥生時代では、中期から後期の甕棺墓 63 基や土壙墓 4 基、祭祀土坑 12 基が確認された安国寺甕棺墓群、前期末から中期初頭の甕棺墓や内行花文鏡を副葬した石蓋土壙墓が発見された市ノ上西屋敷遺跡、中期の甕棺墓や竪穴状遺構、環状土坑列が確認された市ノ上北屋敷遺跡などがある。その他、新府遺跡、西小路遺跡、へボノ木遺跡、二本木遺跡などで遺構と遺物が確認されている。筑後国府跡の古宮地区においても、溝や後期前半から終末期の方形の竪穴住居、掘立柱建物、甕棺墓が確認されている。古墳時代では、新府遺跡で住居跡が、市ノ上東屋敷遺跡で方形区画溝が確認されている。また、高良山から派生した丘陵上に位置する福聚寺古墳群



第 1 図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

では、円墳に加えて前期の方墳2基が確認されている。

筑後国府成立以前の7世紀中頃、通称枝光台地の北西部を中心に、大溝、土塁、河川等に囲まれた軍事的性格の強い官衙群が展開する（前身官衙）。大型建物群の方位はほぼ真北方向で一致し、計画的に造営されている。663年の白村江の戦い後の筑紫平野の防衛のための施設と考えられており、中でも田代地区の大型四面廂建物は中心的な施設とみられる。筑後国が成立したとされる7世紀末、南北約170m、東西100m以上の築地塀や溝で区画された政庁が枝光台地西部に営まれる（Ⅰ期政庁）。区画内部の北東部分に、正殿・脇殿・前殿にあたる掘立柱建物群が検出されている。8世紀中頃、枝光台地の中央部にⅠ期政庁から東へ約200mに、築地塀で区画された南北約75m、東西67.5mの政庁が営まれる（Ⅱ期政庁）。Ⅱ期政庁は、9世紀前半には瓦葺きの建物となり、10世紀中頃に火災で焼失するまで存続すると考えられている。Ⅱ期政庁と浅い谷を挟んだ南東約200m付近では、9世紀中頃から後半まで北辺約85m、南辺約70m、南北長約180mで圍繞された国司館が営まれたと想定され、南辺溝から出土した「守館」墨書土器がその根拠となっている。10世紀中頃、Ⅱ期政庁から東へ約600m付近に政庁を築造している（Ⅲ期政庁）。Ⅲ期政庁の幅約3mの大溝で区画された南北141m、東西137mの範囲内からは、正殿・脇殿など大形掘立柱建物が検出されている。Ⅲ期政庁の東側では11・12世紀代の四面廂建物群や礎水遺構が確認されており、在国司居屋敷と推定されている。11世紀末には南東約400mへ再び移転し（Ⅳ期政庁）、『高良記』に見える「今ノ符」と想定される政庁は12世紀後半ごろまで存続したようである。



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2, 500)

Ⅲ. 調査の記録

1. 調査の目的と経過

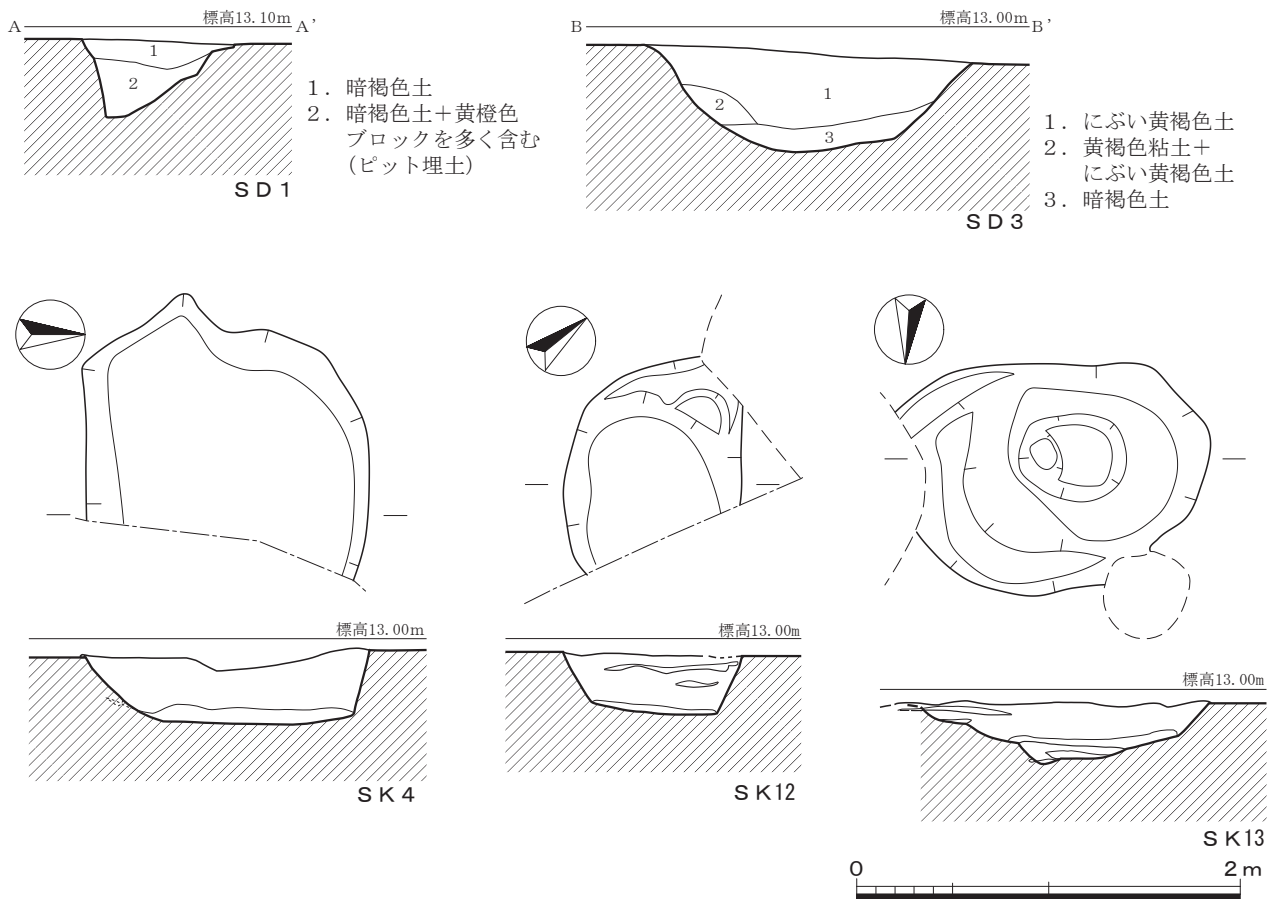
調査地は、7世紀後半代に造営されたとみられる大型四面廂建物を検出した第210次調査の南東側に近接する。また、田代地区にあたる第166・174・196次調査地において、古宮地区から広がる弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構が確認されている。そのため、弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構の広がりとして7世紀後半代における調査地の土地利用を確認するため調査を行った。

令和2年4月8日、表土剥ぎを行い、地表下10～30cmで遺構を確認した。その後、遺構の検出と平板測量を行う。順次遺構掘削、測量、写真撮影を実施し、5月1日に全景写真を高所作業車を用いて撮影した。同月7日に、器材を撤収し、現地での作業を終了した。

遺構配置図は、トータルステーションを用いて測量し、測量データは「遺構くん cubic」で編集・保存した。ただし、土層図は水系メッシュ法(1/10)で記録した。



第3図 遺構配置図 (1/100)



第4図 SD 1・3土層断面図、SK 4・12・13実測図 (1/40)

2. 検出遺構

今回の調査では、溝3条、土坑3基、ピット等を検出した。以下、主要な遺構について記述する。

溝

SD 1 (第4図、図版1)

N-88°-E方向の溝で、西側は調査区外に延びるが、東側は攪乱により破壊されている。長さ4.3m以上、幅約0.8m、深さ約14cmを測る。弥生土器の甕の口縁部や細片、黒曜石の剥片が出土している。

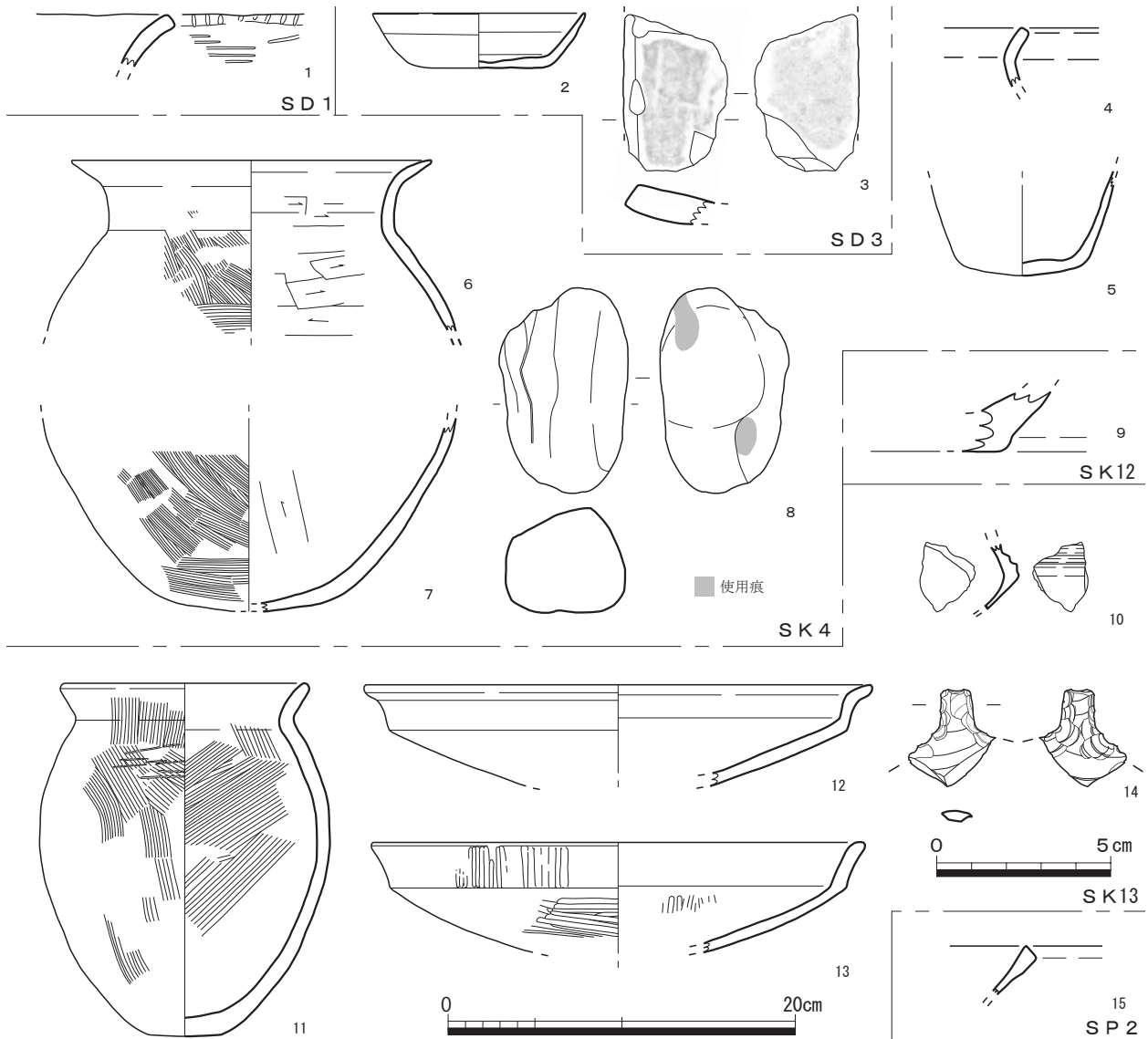
SD 3 (第4図、図版2)

N-6°-E方向の溝で、南側は調査区外に延びるが、北端部は攪乱により破壊されている。長さ2m以上、幅約1.7m、深さ約47cmを測る。断面はU字形を呈する。上層(1・2層)と下層(3層)に分けられるが、上層と下層に明確な時期差はみられない。土師器の細片が出土している。3層からは平瓦が出土している他、溝の底面から土師器の坏が出土している。

土坑

SK 4 (第4図、図版2)

平面形は不整形を呈する土坑で、東部は調査区外に延びる。長軸1.47m、短軸1.07m以上、深さ約36cmを測る。埋土は黒褐色を呈する。出土遺物には土師器片や弥生土器片、すり石などがある。



第5図 遺物実測図 (1~13・15=1/4、14=1/2)

第1表 遺物観察表

遺物No. 第5図	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			色調		調整・文様		胎土 石材、重量	備考	登録 番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面 (釉)	内面 (胎土)	外面 (凸面)	内面 (凹面)			
1 第5図	SD 1	弥生土器	壺	—	—	(3.0)	橙	黄橙	タタキ	ナデ	2mm程度の砂粒を 含む		202001 000001
2 第5図	SD 3	土師器	坏	12.0	7.7	3.2	橙	にぶい橙	回転ナデ 底部ヘラ切り	回転ナデ ナデ	精良		202001 000005
3 第5図	SD 3	瓦	平瓦	(8.7)	(5.9)	1.7	橙	橙	不明	布目	精良 赤色粒子を含む		202001 000004
4 第5図	SK 4	土師器	甕	—	—	(3.4)	橙	橙	ヨコナデ	ヨコナデ	2mm程度の砂粒を 含む		202001 000007
5 第5図	SK 4	土師器	甕	—	(6.8)	(5.2)	橙	橙	ナデ	ナデ ケズリ	2mm程度の砂粒を 含む	内面に赤色顔料付着	202001 000009
6 第5図	SK 4	土師器	壺	20.6	—	(9.8)	橙	橙	ハケ目 ヨコナデ	ヨコナデ ケズリ	1mm程度の砂粒を 含む		202001 000006
7 第5図	SK 4	土師器	甕	—	—	(11.1)	黄橙	黄橙	ハケ目	ケズリ	1~8mm程度の石粒 を含む		202001 000008
8 第5図	SK 4	石製品	磨石	11.7	6.8	5.9	灰白				玄武岩製、632g		202001 000010
9 第5図	SK 12	弥生土器	甕	—	—	(3.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	不明	不明	1~2mm程度の砂粒 を含む		202001 000012
10 第5図	SK 13	弥生土器	壺	—	—	(3.8)	黒褐	黄橙	ナデ	ナデ	1~3mm程度の砂粒 を含む		202001 000015
11 第5図	SK 13	弥生土器	甕	(13.8)	(4.1)	20.3	浅黄橙	浅黄橙	ハケ目 タタキ	ハケ目	1~5mm程度の砂粒 を含む		202001 000014
12 第5図	SK 13	弥生土器	高坏	(29.0)	—	(5.8)	黄橙	明黄褐	不明	不明	1mm程度の砂粒を 含む		202001 000016
13 第5図	SK 13	弥生土器	高坏	(28.2)	—	(6.4)	浅黄橙	黄橙	ミガキ	ミガキ ナデ	1mm~1cm程度の砂 粒を含む	一部赤色顔料付着	202001 000017
14 第5図	SK 13	石製品	石匙	(2.8)	(2.1)	0.3	灰黄				安山岩製、3.4g		202001 000018
15 第5図	SP 2	弥生土器	鉢	—	—	(2.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	不明	不明	2mm程度の砂粒を 含む		202001 000003

() は復元値・現存値を意味する。

SK 12 (第4図、図版2)

楕円形を呈する土坑で、南東部は調査区外に延びる。長軸 0.91 m 以上、短軸 0.92 m、深さ約 30 cm を測る。出土遺物には、弥生土器片がある。SK 4 に切られ、後出する。

SK 13 (第4図、図版2)

楕円形を呈する土坑である。断面は挿鉢状で、長軸 1.48 m 以上、短軸 1.20 m、深さ約 30 cm を測る。出土遺物には、弥生土器片や石匙などがある。東部を SK 12 に切られ、後出する。

3. 出土遺物 (第5図、第1表、図版2・3)

今回の調査では、パンコンテナー1箱分の弥生土器や土師器が出土した。遺物のほとんどは、SK 4 と SK 13 から出土した。SK 13 は、弥生時代後期中葉の遺物が主体である。また、ピットから出土したものは大半が細片で、ローリングを受けている。

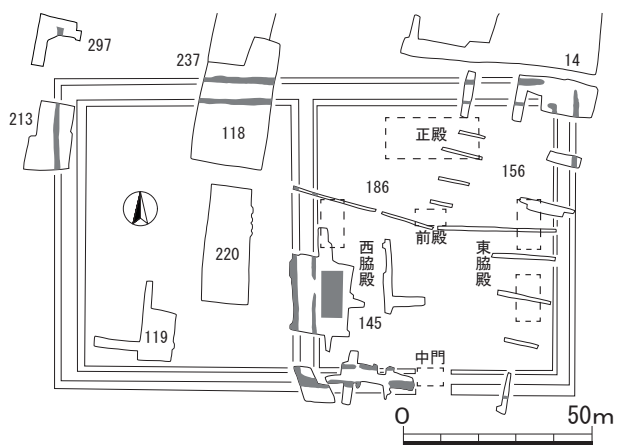
1 は SD 1 から出土した壺の口縁部で、口縁端部に刻目を施す。外面は横方向のタタキがみられる。2 は SD 3 の底面から出土した坏で、底部はへら切りしている。3 は平瓦で、凹面の布目がわずかに見られるが、凸面の調整はローリングを受けているため不明。4 ~ 8 は SK 4 から出土した。4 は壺の口縁部である。5 は甕の底部である。6 は甕で、頸部から直線的に立ち上がり、口縁端部に向かって屈曲し外反する。口縁端部はやや尖る。外面はハケ目、内面は横方向か、やや右上がりのケズリを施す。7 は甕の底部で丸底を呈する。外面はハケ目、内面は縦方向のケズリを施す。8 は磨石で、玄武岩製。一部使用痕が残る。9 は SK 12 から出土した弥生土器の甕底部である。平底を呈する。10 ~ 14 は SK 13 から出土した。10 は細片のため、正確な器種や部位は不明だが、弥生土器の壺とみられる。11 は甕で、胴部の中位よりやや上に最大径がくる。外面は全体に縦方向のハケ目を施すが、肩に横方向のタタキの跡が残る。底部はレンズ状を呈し、タタキが残る。12・13 は高坏の坏部である。12 は屈曲部より直線的に立ち上がり、口縁端部はつまみ出して外反する。調整は摩滅により不明。13 は屈曲部より若干内湾しながら立ち上がり、口縁端部はやや平らに仕上げている。屈曲部より上は縦方向のミガキを、下は横方向のミガキを施しており、内面にもミガキを施す。一部赤色顔料が残る。14 は石匙で、安山岩製。15 は SP 2 から出土した鉢の口縁部である。

IV. 総括

今回の調査では、弥生時代後期から古墳時代の土坑と9世紀代の溝を確認した。

土坑は、切り合い関係と出土遺物から、SK 13 (後期中頃) → SK 12 → SK 4 の順で埋没したとみられる。

SD 1 については、弥生土器が確認できたものの、資料数が少ないため、明確な時期決定は

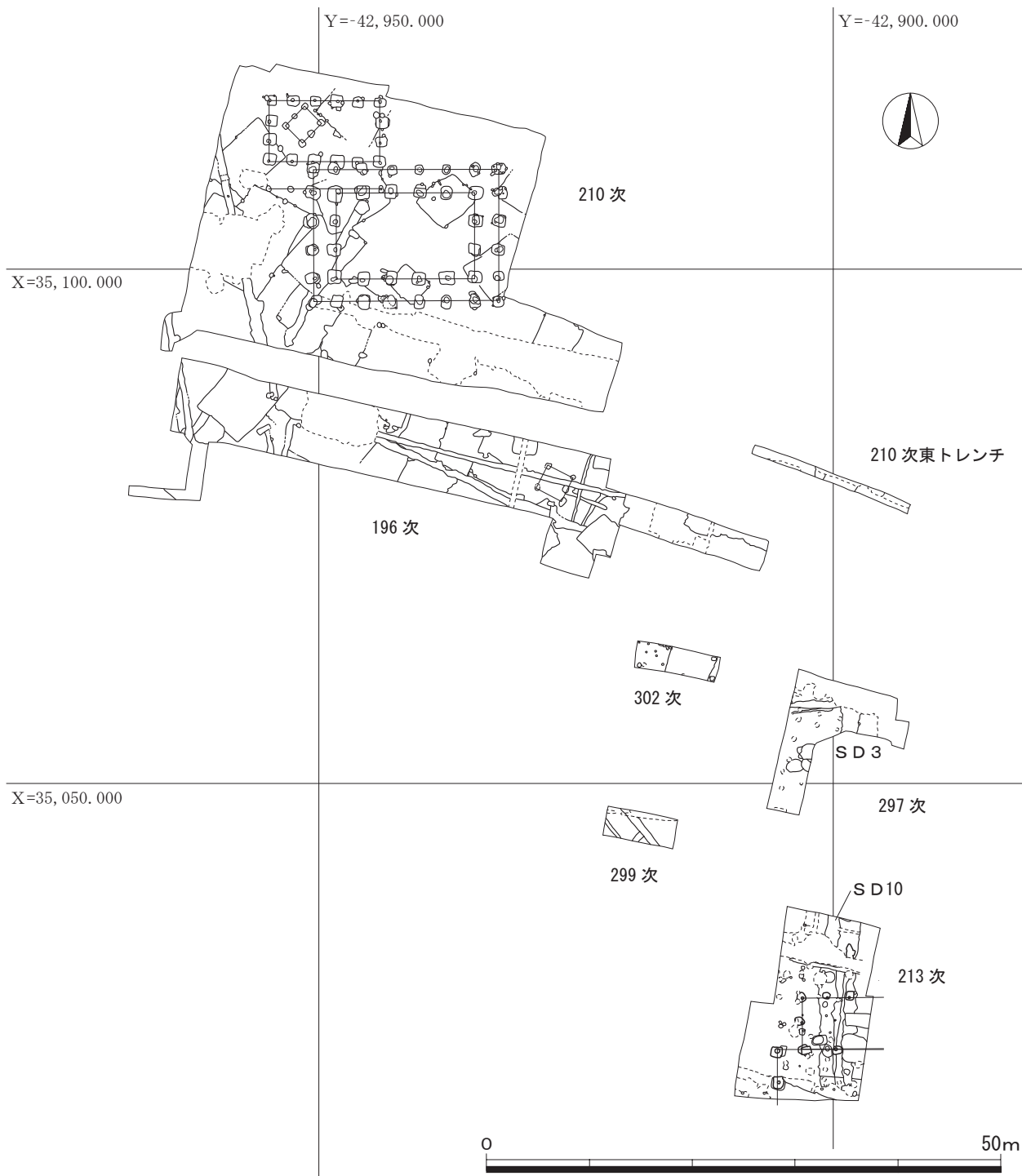


第6図 II期政庁域と西側区画施設推定復元図 (1/2, 000)

できなかった。

7世紀後半代の前身官衙に伴う遺構は今回確認されておらず、第196・213・299・302次調査においても確認されていないため、調査地周辺は空閑地として広がっていた可能性がある。

9世紀代のSD3は、第213次調査で検出されたSD10と走行方位を同じくする。SD10も9世紀代の溝であり、同一の溝である可能性もあるが、ここでは指摘するに留めておく。なお、SD10はⅡ期政庁域の西側区画の溝と推定されている。



第7図 第297次調査周辺の主要遺構 (1/600)

图版



(1) 調査区全景 (南西上空から)



(2) 調査区から第 210 次調査地を望む (南東上空から)



(3) 調査区から高良山・阿弥陀地区を望む (西上空から)



(4) SD1 土層断面 (南から)



(5) SD1 完掘状況 (東から)

図版 2



(1) SD 3 土層断面 (南から)



(2) SD 3 遺物出土状況 (北から)



(3) SK 4 土層断面 (西から)



(4) SK 12 完掘状況 (北西から)



(5) SK 13 完掘状況 (北西から)



(6) 遺物写真①



(7) 遺物写真②



(8) 遺物写真③



(1) 遺物写真④



(2) 遺物写真⑤



(3) 遺物写真⑥



(4) 遺物写真⑦



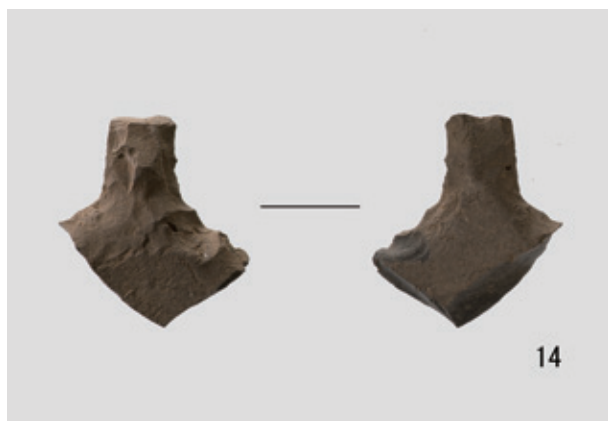
(5) 遺物写真⑧



(6) 遺物写真⑨



(7) 遺物写真⑩



(8) 遺物写真⑪

報告書抄録

ふりがな	ちくごこくふあと — だい297じはつくつちょうさほうこく —
書名	筑後国府跡 — 第297次発掘調査報告 —
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第426集
編著者名	長谷川 桃子
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL: 0942-30-9225 FAX: 0942-30-9714 E-mail: bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2021(令和3)年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
ちくごこくふあと 筑後国府跡 だい297じはつくつちょうさ 第297次調査	ふくおかけんくろめし 福岡県久留米市 あいかわまちあざたしろ 合川町字田代1194- 5, 1195-1, 1195- 3, 1195-8, 1196-1	40203	030112	33° 18' 55"	130° 32' 21"	20200408 ～ 20200507	79 m ²	記録保存調査	
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
筑後国府跡 第297次調査	集落 官衙	弥生 古代	溝 土坑 ピット	3条 3基 多数	弥生土器、土師器、平瓦、 石製品	弥生時代後期の集落と 古代の溝を確認した。			
要約									
調査地は7世紀後半代の大型四面廂建物が検出された第210次調査地の南東側に隣接する。今回の調査では、弥生時代後期の土坑が確認され、古宮地区からの遺跡の広がりも当地にも広がっているとみられる。7世紀後半代の遺構は確認されていないため、大型四面廂建物があった時期は空閑地だった可能性がある。南北方向の溝は底面から9世紀代の土師器が出土しているが、その後の時代の遺構は見られない。									
土木工事の届出日		令和2年3月30日			遺物の発見通知日		令和2年5月11日 (2文財第289号)		

筑後国府跡
— 第297次発掘調査報告 —
久留米市文化財調査報告書 第426集
令和3年2月28日
発行 久留米市教育委員会
編集 久留米市市民文化部文化財保護課
印刷 赤穂印刷株式会社
久留米市中央町1-1